

# ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト

赤松林太郎

8

スペイン カステホン・デ・モネグロス



2019年夏、スペインの大地で灼熱を体感する。場所はアラゴン州のカステホン・デ・モネグロス。バルセロナから車で2時間半、州都サラゴサからだど1時間弱。チャイコフスキー国際コンクールがクライマックスを迎えていたロシアのモスクワから3800キロ離れたこの小さな町にも、世界中から若いピアニストが集まり、私は審査員として赴いた。

数日間滞在したバルセロナも暑かったが、アラゴン州に入ると、その暑さは我慢の限界をはるかに超えて、残酷なものとなった。モネグロス地方は砂漠で知られる。雨がほとんど降らないため、ピレネー山脈から導かれる水が生命の源となる。砂漠といってもラクダで横断するようなノスタルジックな光景が広がっているわけではなく、ごっつとした石が大地を覆い尽くす。ところどころ低木が見られる程度で、次の集落まで数十

## 灼熱の大地に結ばれた絆



離れているところさえある。モネグラルテ国際ピアノコンクールの開催を祝う民俗舞踊が市庁舎前の広場で披露され、教会まで行列が続いた。音楽はバグパイプで奏されるが、管に蛇の皮を巻きつけて装飾しており、砂漠が広がる、モネグロス地方ならではのエ

キソチックなもの。語尾の発音が強調され、踊りでは、その部分で木の撥が打ち付けられる。厳しい風土から生まれた力強さが、この地ならではのリズムや発音となって表れているのだろう。リストが作曲した『スペイン狂詩曲』の「ホタ・アラゴネーサ」（アラゴンの

踊り)で見事に模倣されている。カステホン・デ・モネグロスでの6日間は、天気予報の最高気温に43度、45度が並んだ。2日ほどは水は午前中のうちに何本もなくなり、集落に唯一あるバーでは炭酸水にレモンと塩を入れてもら

コンクールは集落の真ん中に立つ教会で行われたが、石造りの内부는ひんやりと涼しく、ネズミさえも暑さをしのぎにやって来て、ピアノの音に引かれるように姿を現した。日を経ることに審査員の口数も減っていく。この暑さなので、正装する人はいない。コンクールが終わったところで盛大なパーティーが催された。冷房のほとんど効かない公民館に、相撲の土俵くらいの大鍋がいくつも運び込まれ、熱々のパエリアが振る舞われた。こうなると冷えたビールが格別にうまう、スペインならではの暑気払い。100人以上集まった会場では笑い声が響き、時に歌い、踊り、誰かが演説を始める。この中の誰かひとりでも、今のコロナ禍を想像していたらどうか。

後半の3日間はマスタークラスで、22名を指導した。スペインや近隣諸国はもちろん、東はアルメニアやポーランド、イタリア、オランダ、そしてアメリカからは香港人の大学生まで。まさに音楽は国境を超える。英語が共通言語であるように、音楽も共通言語としての役割を持つ。そして出演者同士をたたえ合い、音楽によって絆が結ばれる時間。日本もこうあればよいのにと常々思う。

◇第2月曜に掲載します。



①モネグロス地方のバグパイプ奏者  
②モネグラルテ国際ピアノコンクールの審査員団(いずれも2019年6月、スペイン・カステホン・デ・モネグロス(赤松林太郎さん提供))



あかまつ・りんたろう 1978年、大分県生まれ。2歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

